tout の強意用法について

春木 仁孝
（大阪大学）

現代フランス語の数量詞 tout は強意詞としても用いられる。発表では特に Il est tout rouge.のような発話に見られる形容詞にかかる強意詞 tout と、Pour lui, cette rencontre était *tout* un événement.や C'est toute une histoire.などの発話に見られる＜tout un N＞という構造が強意の意味を持つ場合を中心に取り上げて、その制約や強意の性格について考察する。tout が形容詞にかかる場合は、もちろん形容詞が表わす属性 P に対する強意詞として機能しているが、単に non-P の可能性を排除して属性の程度を強めるだけではなく、属性の程度の高さに対する発見や気付きを通してその属性に焦点を当てるという機能を持っている。つまり発話者（＝認知主体）がインタラクションを通して認知した事態に対する感嘆、驚き、時に非難などのニュアンスを伝えるのという意味での強意なのである。従って、entièrement や complètement で置き換えると tout が伝えようとしていた発話者の事態に対する態度を表わす部分が抜け落ちてしまう。また＜tout un N＞という強意表現は、通常の toute une équipe などの表現に比べて、表現自体が指示的でないか指示対象の存在が確立されていない発話において用いられ、上位語的な N を構成する部分や要素の複雑さや豊かさなどについては聞き手の想像に任される結果、「例外的な、抜きんでた N」、さらには「真の N」という強意表現になる。これらの強意用法を通して tout は現代フランス語において無変化の強意詞へと文法化の道を進みつつあると言える。関連する tout の用法についても、時間の許す範囲でできるだけ触れたい。